

カトリック六甲教会 教会報

2010

6

No.462

昇天の光

J. マシア神父



この前、復活徹夜祭を祝い、私たちは復活の蠟燭を点しました。それは「キリストの光り」をあらわす蠟燭です。そして昇天の主日まで、ミサの間この蠟燭を点してきました。昇天の日には、イエスと弟子たちのお別れを思い出して復活の蠟燭を消します。しかし、イエスが居なくなったわけではありません。ご存知のように、イエスが昇天したというのは、今尚生きておられるイエスが、肉眼では見えないけれども、私たちと共におられるということです。

私たちは、イエスが引き起こした運動を世の中でひろげていくために使わされております。この教えは聖書でいろいろな言葉であらわされています。「天にのぼられた」というような比喩的な表現もあれば、「世の終わりまであなた方と共に、あなた方の傍におられる」という言葉もあります。そしてもっと深い意味を持つ表現はエペソ書の朗読で聞いた言葉です。「すべてのものを満たすため」・「すべてのものを通して働き、すべてのものうちにおられる」というのです。

生前のイエスについて「どこにおられるのかと聞かれたばあい「ここだ」「あそこだ」とか言えたのですが、今、昇天したイエスはどこにおられるのかと聞かれたら、指で指すことができる「ここ」や「あそこ」ではなく、どこにでもおられるわけです。イエスの光りに照らされて世の中を見ることができたら、どこを見てもどこにでもイエスがおられるということに気づくことができます。

私たちはイエスの昇天を祝うに当たってこう祈りたいです。どうかイエスの光りに照らされて世界を見ることが出来ますように。

光りと言えはイエスの言葉を思い出します。「私はこの世に来たのは、目の見えない人が見えるようになり、目が見えるつもりでいるのに見えない人は自分の失明に気づくためだ」とヨハネ福音書で言っています。

最近この言葉を思い出して考えさせられます。現代は大変な政治と経済危機に直面している世の中です。しかしその問題が見えないようにするためにこの世の権力者にとって都合のいい煙幕（煙の層）が張られることがあります。去年おおげさな神経質を引き起こした新型インフルエンザ騒ぎはそのひとつの典型的な一例に思われてなりません。

1998年にノーベル文学賞を受賞したポルトガルの作家ホセ・サラマゴは『白の闇』と言う小説を書きました。次のように書いています。ある人が突然、町の交差点で失明します。視界が真っ白になる病気です。原因不明のまま、伝染病のように感染は広がっていきます。政府はかつての精神病院を収容所にして患者の隔離を始めます。そこでは、秩序が崩壊し、人間の本性がむきだしになってゆきます。大変な社会状況になります。やがてその国のほとんどの人が感染して失明します。この趣旨の小説ですが、著者はその本のはじめに『訓戒の書』を引用します。「見えるなら、よく見よ、よく見えるなら、じっと見よ」という言葉です。著者自身が次のように語っています。「人間が理性の使い方を見失ったとき、たがいに持つべき尊重の念を失ったとき、何が起るかを見たのだ。それはこの世界が実際にあじわっている悲劇なのだ」と。

私は去年新型インフルエンザに関するあの大騒ぎにまどわされている状況を不思議に思いながらこのサラマゴの小説を読み返しました。そしてヨハネ福音書の言葉をあらためてかみしめました。「見えない人が見えるようになり、見えないのに見えるつもりで居る人々にめざめさせる」と言い、人々にめざめさせるイエスの光りから刺激を受けたいです。そして世論の操作に惑わされることなく、覚めた目で現代社会の歪みを見つめたいと思います。



(第二回) キリストの愛のしるしである目に見える証 (秘跡)

主任司祭 松村

最近、この秘跡に預かる人が減少しています。理由の一つに“裁きの場”と誤解されている方が多いのではないのでしょうか。この秘跡はむしろ助力の与えられる場であり、日々新たな人に生まれ変わることの出来る力と恵みが与えられるのです。

ゆるしの秘跡

すべての人は、何らかの形で悪の影響を受けています。そこから悪を行う、あるいは悪（罪、疎外、不正、抑圧など）の支配の下に生きているということ意識しています。と同時にまた、それから解放されると確信を持っています。そこで「和解」と「ゆるし」は、教会の中で非常に大切にされており、使命として宣言され実践されています。司祭に罪を告白し、罪を悔い改め自らを正す決心をする信者は、その司祭によって与えられる赦免を通じて、洗礼以後犯した罪のゆるしを神から受け、同時に、罪を犯すことによって傷つけた教会と和解するのです。したがって、少なくとも年に一度は、この秘跡を受けることを勧めます。



マザー・テレサの言葉を読む・第1回 「小さなことに大きな愛を」

助任司祭 片柳



「大切なのは、どれだけ大きなことをするかではなく、
小さなことにどれだけ大きな愛を込めるかです。」

世の中の基準で言えば、大切なのは何か大きなことをして有名になったり偉くなったりすることでしょう。ですが、マザー・テレサはそんなことよりも「小さなことに大きな愛を込める」ことが大切だと言います。一体、マザーは何を基準にしてそんなことを言っていたのでしょうか。

それは、一言でいえば「神への愛」という基準だと思います。「神の愛の宣教者会」はそもそも十字架上で人類の愛に渴いているイエスの渴きを癒すために生まれたものであり、マザー・テレサにとっては「イエスの渴きを癒すこと」、つまり「神を愛すること」が何よりも大切でした。

この基準に立つならば、世間的に見て「大きなこと」をするかどうかは問題ではありません。なぜなら、「大きなこと」というのは所詮人間の目から見て「大きなこと」にすぎず、神から見たときにそれが「大きなこと」かどうかはまったく分からないからです。逆に、人間の目には「小さな」ことにすぎな

くても、神の目には「大きなこと」である場合もあります。

それに世間的に見て「大きなこと」をしたいと願うとき、その動機はほとんどの場合「大きなこと」をして自分が有名になりたい、偉くなりたいというようなものです。神はどうしてもよく、自分のために世間から見て「大きなこと」をしているのです。

「神への愛」という基準に照らせば、大切なのは人間の目を基準にして自分のために「大きなこと」をするということではありません。むしろ大切なのは、神の目を基準にして、人間の目には「小さなこと」であったとしてもそれを神のために心を込めて行うことでしょう。自分が偉くなるために大きな事業を成し遂げるよりも、神への愛、家族への愛ゆえに自分を捨て、毎日の家事に心を込めることの方が神の目には「大きなこと」であるかもしれないのです。



「地区世話人会の集い」について

主任司祭 松村

5月16日（日曜日）午後2時より小聖堂にて第一陣「地区世話人会の集い」が始まりました。集いの内容について連絡不足であったためか、参加者数は10名でした。

参加した世話人の方からは、「一体、何が始まるのか？忙しい時なんだから程ほどに・・・」と言った言葉が漏れた。ところが始まってみると予想に反し、「祈りについて」と題して話された。キリスト信者にとって“祈る”ことは生活の中心でなければならないが、“祈り”そのものが今一掴めていない、どうすればよいか解らない。そんな時、こんな話が聞けて良かった。というのが第一陣世話人から頂戴したりアクションとその声だった。

「地区世話人会の集い」は、世話人の方々に“エネルギーの充電”をして戴くのが目的であり、決して何かの犠牲をする、お荷物を背負わせるのではなく、むしろそのお荷物を降ろして戴く集いで有りたいと願っています。

また、この集いはシリーズになっていますので、集いの指定日に参加出来ない場合は、他のグループ（同セッション実施中）に参加して戴き、次のセッションに進まれることをお勧めします。

どうぞお気軽に参加して戴き、皆様の祈りの一助になることを期待します。



パイプオルガンの設置に当たり

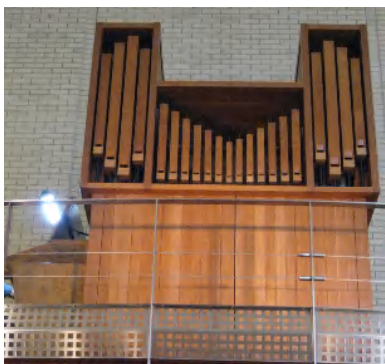
オルガンチームリーダー 馬場

この度、東梅田教会から礼拝や多くのオルガニスト養成に使用されたパイプオルガンをお譲り頂くこととなりました。東梅田教会のご好意に報いるべく、オルガンチームが発足しました。構成メンバーはオルガニスト2名を含む7名で、今まではパイプオルガン導入に至る準備をしてまいりました。

そのパイプオルガンもいよいよ6月4日（金）に部品が搬入され、6月7日（月）～9日（水）の3日間で組み立てられ、6月10日（木）～11日（金）の2日にわたる整音の後、12日（土）以降使用が可能となります。8月には皆様の賛同を得まして、ご披露目演奏会が開催出来るように

準備を進めたいと思っています。

今後、オルガンチームとしましては、将来展望として今回のパイプオルガン導入を手がかりにして、パイプオルガンの果たす意義を基にした計画に発展いたしたく思います。



アイコンへの視角

河谷



「聖三位一体」

アイコンの世界に足を踏み入れるには、絵画的に理解しようとする姿勢よりも先に、アイコンの前に無防備で佇んで幾度となく親しみ、魅入られる方が近道であろう。アイコンの作画法も、聖人伝や聖書の知識もその後から自ずからやって来る。

機会があれば、モスクワのトレチャコフ・ギャラリーのアンドレイ・ルブリョフの代表的アイコン「聖三位一体」(ホーリー・トリニティ)の前に立つもよし、シナイ半島は聖カテリーナ修道院の沙漠に守られて奇跡的に残存している六世紀の「聖ペトロ」に向き合うのも、また神田のニコライ堂へ足を運ぶのもよい。ただ

にアイコンの眼差に運命的に射抜かれるならば、すでに私たちは聖母マリアに抱れる幼児イエスの眼で、母なるアイコンを見つめ返すことになる。

名のあるアイコンのみを骨董的に見て歩くのも一つの方法であるが、アイコンの世界に到る道はそれだけではない。例えば、ギリシャの田舎の二つ三つに岐れる所、または海辺の崖などに必ずといってよい程、アイコンの古びた写真が蔵ってある祠が見られる。行き倒れの旅人を祀り、難所への安全を祈り、教会ならぬ祈りの場となっている。その写真アイコンに燈明を上げ、黄昏を背に受けて祈る老婆の光景は、アイコンの世界をやさしく映し出す。私たちはそこに単なる写真の聖像を通して、聖なる信仰の原像にまで没入した姿を見る。この時、写真アイコンは老婆の前で美術館秘蔵のアイコンを超えて輝きを放つ。アイコンが絵画作品としてだけでなく、常に「アイコンの世界」として捉えられる由縁もそこにあるのではなかろうか。ロシアの寒村でも、ユーゴスラビアの湖畔でも、パレスチナの沙漠でもアイコンは闇と燈明の中、人々の悲しみを湛えた眼差を受けて、静かに神秘の翳りを深めてきた。アイコンの遙かな眼差、見つめるものの視線を少しく外して世界の果てに、魂の奥処に注ぎ込まれる眼差に醸された生き方がある。ギリシャの修道院国家アトス山の、今なおアイコンを求道として描いている画僧たちの余分なものを総て捨て去った空間は、アイコンを心身共に糧とする世界である。彼らの作品に署名はなく、日夜画架に向う画僧の眼窩には、とうにあのアイコンの遙かな眼差があきらかに張り付いている。

またアイコン研究家にもほとんど知られていないユダの荒野なるマルサバ修道院。そこでは芳香を放つ聖人の頭蓋骨を秀れたアイコン群がとり囲み、ダマスキヌス修道院長の深い眼差に生きているアイコンを感受することもさながらにできよう。豪華華麗なるイコノスタシスとパンと豆スープだけの粗末な食事。ボルテージの高い静寂の信仰生活。いかに私たちが文明の名のもとに多くのものを失ってしまったかと、もの言わぬ荒野のアイコンが告げる。絵画史的にもアイコンは今迄、泰西名画と東洋絵画の狭間でともすれば忘れられてきた。だが、アイコンの眼差はルネッサンスの巨匠たちに初源の靈感を与え、また現代絵画のルオーやモジリアーニ、エル・グレコ(元アイコン画僧)、カンディンスキーの作品にもその影響が見られる。また曼陀羅とも、無数に描き込まれる聖人群のアイコンによって、遠くて近い兄弟的血脈を通わせている。表現の自由の追及に足をとられ、見るものを釘付けにする内発力をなくした絵画状況をもアイコンの眼差は貫いているかもしれない。

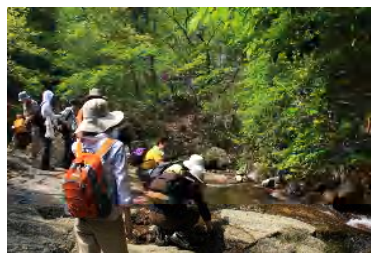
繁殖した鼠が先を競って断崖から海へ飛び込んでいくがごとき現代の時間のなかにあるがゆえに、自らと確かに向き合うために、私たちは精神を冷たい水で洗い直し、いま、このアイコンの眼差を浴びて聖なる世界に旅立ち、「出エジプト」したいとおもう。「イコノフィロス」すなわち「アイコン愛」に憑かれる、決して多くないであろう仲間たちにと共に。そしてこの切烈な愛がもし病という形をとるならば、大いに、いさぎよく、「アイコン病」に冒されてみようではないか。そのとき、私たちの前に、アイコンは異界への聖なる扉としてある。

【河谷氏プロフィール】1970年早稲田大学卒業後、1974～85年まで、イスラエルに滞在、ヘブライ大学に学ぶ。ヘブライ文学とアイコン研究のかたわら聖地ガイドをつとめる。現在、イスラエルをはじめ、中東・ヨーロッパ、日本国内の巡礼地や遺跡を訪ねる旅のプランナー、およびガイド。著書『出エジプト私記』『聖書の土地と人びと』(三浦朱門夫妻共著)など等。その他多数。



ヤッホー会、新緑の六甲山へ

助任司祭 片柳（青年会担当）



5月5日、連休の最終日に久しぶりの「ヤッホー会」で六甲山に登ってきた。今回は高校生から社会人まで、途中参加も含めて19人が参加してくれた。

教会を出発したわたしたちは、永峰墓地の辺りから柚谷道と呼ばれる登山道に入った。ふだん大学生活や会社勤めで体を動かしていない若者も多かったので、わたしたちは柚谷道の新緑の中をゆっくりゆっくりと登って行った。途中、神戸の街が見渡せる岩の上に立ち、会の趣旨通り一人ひとりが大きな声で「ヤッホー」と叫んだ。山道を歩きながら自然との一体感を味わうだけでも十分気持ちいいが、こうして大声で叫ぶともっと気持ちが軽くなるように思う。これ以上のストレス発散はないだろう。

教会を出発して2時間半ほどで山頂の穂高湖に到着し、昼食をとったあとわたしたちは徳川道に入った。柚谷道と同じく、溪流沿いにせせらぎの音を聞きながら進んでいく道だ。途中、あちこちにミツバツツジやヤマブキ、野生のフジの花などが咲いていた。

鮮やかな新緑、咲き乱れる花々、すがすがしいせせらぎの音、鳥たちの愛らしい鳴き声、それらの中を歩いていると心が洗われるようで、まるで天国に迷い込んでしまったのではないかという錯覚さえ覚えた。5月は、わたしたちの住むこの世界が一番天国に近づく月なのかもしれない。この月がマリア様に捧げられているのもっともなことだと思う。1時間ほどで目的地の森林植物園に到着した。

森林植物園を散策し、名物のソフトクリームを食べた後、わたしたちはバスで三宮まで戻って解散した。そのあと、「有志」はビア・ホールでさらに懇親を深めた。個人的なことといえば、5月5日はわたしの38歳最後の日だった。これ以上ないくらいすばらしい1年の締めくくりだったと思う。参加者のみなさん、本当にありがとうございました。



みんなの広場

昔と今

ヨハネ 三好

昔「小さき花」、今「マザー・テレサ」。この二人の「テレジア」は対象の両極にあるように見える。

一人は世俗を離れ観想修道会の囲いの中で20余年の短い地上の命を終えた。

一人は一旦立てた誓願を解かれ囲いを出て巷に80年余の命を終えた。

その一生はまさに正反対であった。だが、この両極端にあるような二人は、実は両極端にあるのではないかとと言えるのではないか。

二人のテレジアは、それぞれ神が設えた自分の道を忠実に歩んだと言うこと、つまり誰もが「小さき花」になるのではなく、誰もが「マザー・テレサ」になるのでもない、私は「私」でなければならないということではないか。

その「私」に神が設えられた道はどれだろうか。今も迷って行きつ戻りつを繰り返している。

5月1日のJ. マシア神父のブログ「手作りの考え方」にある「私が愛したように」を読んでいる、PCファイルのスクラップに取り込んでいた、昔のイエズス会小冊子「この路を」にあったカール・ライフ神父様の「大路と小路」を思い出し読み返して、ふとこんなことを考えた。お前は日本語が分からないのかと言われるかもしれないが。



花 と 私

中口

私は小学校のころから、球根の交換（アネモネ・チューリップ・グラジオラス・ダリア等）を友人とやり取りしていた。開花時の喜びは一入（ひとしお）で、楽しみを覚えた。

私は教会で園芸に携わるようになって、約8年になる。園芸の作業をするなら土作りから始めることを思っていた。環境に優しい有機栽培を心掛け、堆肥作りを始めた。NHK テレビ放送『園芸』で放映されていたのがきっかけとなった。これまで落葉は廃棄されていたが有機堆肥を作るには貴重品となる。絶好の機会と思い250リットル用のコンポートを購入して頂き、堆肥作りを始めた。一昨年は台風の影響で、強風に煽られ一樽の落葉しか集められなかった。昨年は台風も無く、強風も無く、落葉は三樽一杯になり、今年は沢山の腐葉土が出きるのが楽しみである。

腐葉土のできる過程を紹介します。10月～12月、落ち葉を集め、油粕・骨粉と落ち葉、水を交互にサンドイッチにして、3月ごろ、中返し、5月中頃から6月に取り出し、日干しして篩に掛け、大中小に分け、植え替え時期、6月と11月に使用。また、古い土に腐葉土をまぜ、新しい土に復活させリサイクル、再利用する。

教会の庭は1月、松。2月、梅。3～4月、アーモンド・紫木蓮・拳・桜。桜は陽光桜・染井吉野。5月、平戸つつじ・皀月つつじなどが咲き誇り、モミジは春に新緑、秋には紅葉で皆の心を和ませてくれる。私はなんと言っても、ご降誕祭の頃に咲いて主イエスを祝福するごとく咲く、ヒマラヤ桜に毎年、大変感激を覚えております。残念に思っているのは藤の花の咲き方がもっと下に下がるようになる研究をし、皆さんに大変喜んでいただけるように頑張りたい。これからも六甲教会の庭園がよりよい憩いの場になるように努力したい。

皆様にいつも“ご苦労さん”“ありがとう”の言葉を掛けていただく度、励ましによって疲労が癒されます。神に感謝。



エコキャップ 報告

5月11日、エコキャップ推進協会へ2度目のエコキャップの出荷をいたしました。今回の数量は22.6Kg(9,040個)。11.3人分のワクチン購入と71KgのCO₂削減ができました。皆様のご協力の賜物です。ありがとうございました。

今後もエコキャップを『世界の恵まれない子供達』と『CO₂削減』のために集めて参ります。下記点にご留意頂き、ご協力ください。



- 1、材質はPP（ポリプロピレン）。缶ビールのフタは集めておりません。ご注意ください。
- 2、汚れているものはきれいに洗い、水気を拭取って、ご持参ください。これから夏に向けて、悪臭が漂わないように、十分注意をしたい。

エコキャップはイグナチオホールに備えてありますカゴ、またはゴミ置き場横の階段下にありますコンテナへお入れください。宜しく願いいたします。

（教会学校）

各部だより

📖 典礼部

「典礼奉仕者の集い」

- ・6月19日(土) 10時～12時
於：第1・第2会議室
- ・6月27日(日) 13時30分～15時30分
於：第1・第2会議室

お話し：松村神父様。両日とも同じ内容です。
典礼奉仕者の方(ミサ案内係、お花、海星病院含む)は19日または27日のいずれかの日にご出席下さい。

📖 社会活動部

次回連絡会：7月2日(金) 10時ミサ後予定

📖 壮年会

6月20日(日) 黙想会 13時～15時
小聖堂・聖堂にて、松村神父のお話し。会費無料。
壮年会に限らず多くの方の参加をお待ちしています。

📖 教会学校

- 6月 5日(土) 通常
- 12日(土) 休み
(東ブロック大会参加の為)
- 13日(日) 東ブロック大会
- 19日(土) 通常
- 26日(土) 通常



《お知らせ》

【社会活動部より】

- 6/4(金) 初金ミサ後 ♪ “りゅうりえんれん物語” 詩の朗読会 於：第1・2会議室
カレーの昼食準備もしております。お誘い合わせのうえ多数ご参加下さい。
- 6/12(土) 10時 ♪ 炊き出し(イグナチオホールお台所)
小野浜グラウンドでおじさん達とのお話しに来て下さるだけでもOKです!
- 6/20(日) 9時ミサ後 ♪ ブックフェアー パウロ書店の本販売や、手芸部作品販売等。
手作りコーナーも同時開催。

神戸地区平和旬間行事に向かって Hop! Step! Jump!

- ① Hop! 「りゅうりえんれんの物語」(茨木のり子作) を読んでみませんか。
強制連行で函館の炭鉱に連れてこられたりゅうりえんれん。劣悪・過酷な状況に脱走を企て、終戦も知らず13年、北海道の山中を転々と移動し穴倉生活で命をつなぐが、ついに発見される。膨大な資料の中からようやく素性が判明し、14年ぶりに祖国に帰る。そこには妻と14歳になった息子が待っていた。彼の人生を翻弄したものは……。本を読んだあと、沢知恵さんのCDを聞いてみましょう。長ければ、その一部を聴いてみませんか。逃亡の日々が淡々と歌われ、北海道の大自然がよりいっそうイメージを膨らませ、こころに響きます。
- ② Step! シナピス学習会 ～神戸地区～
テーマ「在エジプト・ヘブライ人のモーセと在日・韓国・朝鮮人の私～寄留者の苦しみを体験させる～」
日時：6月19日(土) 14:00～ 場所：たかとり教会 聖堂
講師：林 和則神父(大阪大司教区司祭 社会活動センター・シナピス センター長)
- ③ Jump! 沢知恵ピアノ弾き語り 「りゅうりえんれんの物語」
日時：8月14日(土) 13:30～(開場12:30～) 於：神戸中央教会聖堂
入場：無料 *入場整理券が必要です。ご希望の方は各小教区の社会活動委員にお申し出ください。

この本は、ミュージカル映画「サウンド・オブ・ミュージック」の原作と言える物語で、著者マリアの目から見てつづられた、トラップ・ファミリーの物語です。

物語の中で「オーストリアの“田舎の”」待降節やクリスマス、四旬節やご復活祭の様子が、実に生き生きと語られています。典礼暦と自然の季節の移り変わり、そして人々の生活とが、ごく自然にひとつに溶け合っていることが伝わってきます。「なんと心豊かな暮らしだろうか」と思わされます。信仰生活のエッセンスみたいなものがあるとして、この物語からも汲み取ることができるような気がします。

(青地)



『おじいちゃんがおばけになったわけ』

キム・フォップス オーカソン作 (あすなろ書房)



小中学生向けにということで、今回紹介する本は絵本です。絵本は幼児のためのものだと思われがちですが、その中には大きなメッセージがあったりします。

この絵本では最初に主人公の「僕」が大好きな「じいじい」が突然亡くなります。死んだらどうなるの？ママに聞いたら「天国へ行くのよ。」パパに聞いたら「土になるんだ。」と言います。ピンと来ないと思っていたら夜になって死んでしまったはずのじいじい部屋にいる。なんで？おばけ？僕が持っている本には「この世に忘れ物がある人はおばけになる」と書いてあります。じいじい、何か忘れていた事があるんじゃないの？二人で一生懸命考えます。忘れていたのは・・・。

「死」がテーマになっているのになんともユニークで愛らしいお話です。この絵本は子どもにとっても身近に「死」について考えたりできるものだと思います。大切なこともきちんと描かれています。そして、私達大人は最後のシーンでじんわり込み上げてきてしまうのです。

(吉村)



<西洋美術史に見るキリスト教絵画>

ファン・デル・ウエイデン、《洗礼者ヨハネの誕生》

1450年代、ベルリン国立美術館

柁木



『西洋絵画の主題物語』より

この作品は、ファン・デル・ウエイデンが描いた「洗礼者聖ヨハネの祭壇画」の一部である。

洗礼者聖ヨハネの誕生のいきさつについては『ルカによる福音書』第1章に詳しく書かれている。奥の寝室では出産直後のエリザベトと彼女の世話をする婦人、手前に幼児ヨハネを抱く聖母マリアと子供の名前を書くザカリアが描かれている。聖母が受胎告知を受けたあとエリザベトを訪問したときエリザベトは妊娠6ヶ月を迎えていた。『黄金伝説』(ヤコブス・デ・ウォラギネ、1267年)によれば、「マリアは3ヶ月間エリザベトの家に滞在され、子供が生まれると神聖なおん手で取り上げられた」とのこと。中世からルネサンス期に至る時代のキリスト教絵画の多くは、福音書をベースにしながらも、『ヤコブの原福音書』などの外典や『黄金伝説』などの言い伝えを基にして描かれていることが多い。

次に画家ファン・デル・ウエイデン(1399年ごろー1464年)について述べる。ウエイデンは15世紀前半のブリュッセルを代表する画家である。

師のカンパンと《アルノルフィーニ夫妻の肖像》で有名なヤン・ファン・エイクから大きな影響を受けた。当時のネーデルラント地方の作品に共通しているのは、事物を微細な部分まで写実的に描きこんでいることである。これは同時代のフィレンツェを中心とするイタリアルネサンス絵画と異なる。《洗礼者ヨハネの誕生》では、エリザベトの寝室の外側にお祝いにかけてつけたと思われる人物や聖母とザカリアの上方のアーチに彫られたレリーフなどが繊細に描かれている。このような細密画が当時のネーデルラント絵画の特徴である。

なお、ヤン・ファン・エイクやファン・デル・ウエイデンが描いた窓の表現方法を後のフェルメール(1632ー1675年)が参考にしたのではないかと私はひそかに思っているのだが……。

ネーデルラント絵画に興味のある方は私のホームページ(<http://www.ricv.zaq.ne.jp/ekabf008>)の「旅行記」のうち「散策記(北方ルネサンス美術鑑賞ツアー)」をご参照ください。

広報部員のつぶやき

ひりひりとした言葉が横行し、人と人との温もりが乏しく感じられる。人間関係が成り立ちにくい現代社会をどう捉え、何をしなければならないのか。自分の存在とは何なのか。道とはどこにでもあり、どこにもないものなのかも知れない。砂をかむような人の世に、クリスチャンとして宣教をどう捉え、どう行動するのか。

5月29日(土)に「宣教を考える集い」が開かれた。大きな一歩を踏み出した。預言者イザヤ、使徒パウロのように心からの回心をしなければならないのでは……。信徒の日々の生活に期待したい。(浮雲)

教会報7月号の発行は、7月4日(日)です。

編集会議は6月27日(日)です。

記事原稿は、6月20日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会

〒657-0061 神戸市灘区赤松町3-1-21

電 話 078-851-2846

F A X 078-851-9023

発行責任者 松 村 信 也

編 集 広 報 部